

正蔵五〇、五六二下～五六三上)

- ⑦ 大正蔵四六、七八七中
- ⑧ 大正蔵四六、七八七下
- ⑨ 大正蔵四六、七八七下
- ⑩ 大正蔵四六、七八七下
- ⑪ 若き頃、慧思は弥勒菩薩の夢を見ている。「又弥勒弥陀說法開悟、故造三二像並同供養。又夢隨從弥勒与諸眷屬同會龍華。心自惟曰、我於釈迦末法受持法華、今値慈尊感傷悲泣豁然覺悟。」(大正蔵五〇、五六二下)
- ⑫ 弥勒の大会において、弥勒が『摩訶般若波羅蜜經』を説こうとする時、金字の般若經が大衆の前に現前するが、それを被見するには慧思の名号を唱えなければならぬとしている。
- ⑬ 『諸法無諍三昧法門』巻上の冒頭部で、大慈大悲や六神通、四弘誓願などの仏法の功德が、すべて禪定より生じるとし、「一念心中一時行、無前無後亦無中間。一時説法度衆生。皆是禪波羅蜜功德所成。」(大正蔵四六、六二七下)と述べている。
- ⑭ 大正蔵四六、七〇二中
- ⑮ 慧思の名号を称えたり、聞くことにより、六道の者が菩提心を発して救われるなどの功力があることを、願文中において、しばしば『無量壽經』などを模して語っている。

- ⑯ 大正蔵四六、七二八下
- ⑰ 大正蔵四六、七八九上～中
- ⑱ 大正蔵四六、七九二下
- ⑲ 大正蔵四六、七九二下
- ⑳ 大正蔵四六、七九二下
- ㉑ 大正蔵四六、七九二下
- ㉒ 大正蔵四六、七九二上
- ㉓ 大正蔵四六、七九二上
- ㉔ 大正蔵四六、七九二上
- ㉕ 大正蔵四六、七九二上
- ㉖ 大正蔵四六、六三二上
- ㉗ この問題については、小林泰善「南岳慧思立誓願文の形成に関する問題」(『印度学仏教学研究』二十四卷二号、一九七五年)や佐藤哲英著『統天台大師の研究』(百華苑、昭和五十六年刊)の一七四～一七六頁に議論されている。

法然門下の教義に関する研究書について

善 裕 昭

法然門下の教義・教理方面の研究を意図していたが、私の怠慢から十分な準備を進めることができなかつた。ここではせめて私の知るその方面の研究書を紹介することによって研究助手としての責を塞ぐことにしたい。なおここで紹介する研究書は、二師以上を取り扱ったもので、例えば平井正成『隆寛律師の浄土教附遺文集』のように一師のみを集めたものに扱ったものは除く。また近代以前にも浄土宗・真宗の学匠たちの注意すべき研究があるが、ここでは近代以降のものを紹介する。

望月信亨①『略述浄土教理史』(大正一〇 浄土教報社、昭和五二 日本図書センター)、②『法然上人とその門下の教義』(昭和三五 佛教大学仏教文化研究所、のち『浄土宗選集』巻五に所収)。①はインド・中国・日本の浄土教の思想変遷を概説したもので、とくに法然門下の教義の解説に力をいれている。仏教学の泰斗らしいしなやかな文体で弁長・隆寛・長西・幸西・証空・親鸞の教義を扱う。その思想傾向から前三者を起行派、後三者を安心派と範疇化されているが、とくに安心派に対しては批判めいた言辭が目立つ。そのことは安心派の教学を評して「師の上人が、此の外に別の子細候はずといはれた浄土の宗義の上に、別の子細を造り上げようと努めたのである。」(三〇六頁)と皮肉られる点から端的に窺うことができる。ただし望月氏の幸西・親鸞は江戸期浄土宗の延長線上にあろう。②は大正大学での講義の際の筆録を門下生が出版したもので、隆寛・幸西・証空・親鸞を扱う。なお隆寛について、①の時点では未発見であった金沢文庫資料がここでは使用されている。

杉紫朗③『西鎮教義概論』(大正十三 龍谷大学出版部、昭和五〇 百華苑)、④『二河譬の三家観』(昭和三、のち『新編真宗全書』巻二〇に所収)、⑤『浄土三派の他力論』(昭和十二 興教書院)。③は弁長と証空の教義を扱う。とくに証空が用いる行門・観門・弘願門などの特殊名目の簡明な解説は貴重であり、難解な証空教学を学ぼうとする者にとってのよき水先案内の書である。④は善導が『観經疏』散善義に展開する二河白道の譬を親鸞・弁長・証空の三師がいかにか解釈したかを説き、⑤は同三師の教義を他力論の視点から究明する。いずれもよくかみ砕かれた文体である。住田智見⑥『浄土源流章』(大正十四 法蔵館 原題は『浄土源流章解説』、昭和五七 法蔵館)、⑦『異義史之研究』(昭和三五 丁子屋書店、昭和六一 法蔵館)。⑥

は凝然『浄土法門源流章』の綿密な注釈書。周知のように凝然は三国の浄土教を概観する中で、法然門下五流、幸西・隆寛・証空・弁長・長西の教学を紹介した。これに対する住田氏の注釈は有益なものであり、注釈のみにとどまらず解説が多方面に及んで住田氏の門下研究の書という性格をもつ。⑦は大谷大学の講義の自筆原稿を門下生が出版したもので、内容の整合性に欠けらばあるものの、⑥とともに住田氏の堅実で実証的な学風が窺われ、また多くの関係資料を提示してくれる。

花圓映澄『諸宗念仏教義の概観』(昭和五 興教書院)。仏身仏土・別時意会通・往生信行の項目を立てて門下の教義特質を解説する。

安井広度『法然門下の教学』(昭和十三 法蔵館 原題は『法然聖人門下の教学』、昭和四三 法蔵館)。長西・弁長・幸西・証空・隆寛の順に教義を解説している。その解説の順序についてだが、法然の信仰に比較的遠い人を前とし近い人を後にしたと云う(自序二頁)。内容は相当に詳細なものであり、とくに弥陀の側からの救済論ではなく人間の側の行信論の視点から各師の教義特質を究明していく傾向がある(序論二七頁)。なお附録として幸西『玄義分抄』、隆寛『具三心義』などを収めている。

石田充之⑧『日本浄土教の研究』(昭和二七 百華苑)、⑨『浄土教思想入門』(昭和三一 百華苑)、⑩『浄土教教理史』(昭和三七 平楽寺書店)、⑪『鎌倉浄土教成立の基礎研究』(昭和四一 百華苑)、⑫『法然上人門下の浄土教の研究』上下二巻(上下ともに昭和五四 大東出版社)。著書の分量の多さからもわかるように、石田氏は門下教義の研究を最も精力的に進められた方である。とくに⑫は現時点におけるこの分野の代表的研究書ともいべきもので、上巻では隆寛・証空・幸西を扱い、下巻では弁長・長西・静遍・良遍・親鸞を扱っており、各師の関係資料も整理して提示してある。ただ気になるのは、石田氏の重厚な文体は時として息苦しく、また弁長を浄土門の自力強調派として位置づけるのもやはりその表現に問題が残る。しかしさすがにこの分野の大家らしく資料の読みこみは深く、是非とも参照すべきものである。

坪井俊映『浄土教汎論』(昭和五五 隆文館)。もともと佛教大学の通信教育用のテキストであったものを(原題は『浄土学概論』 昭和五三)、内容を若干変更し書名をかえて出版されたもの。汎論という書名のように浄土教に関する諸事項を概括的に述べてあり、門下についても証空・一遍・親鸞の教義を簡明な叙述で解説してある。浅井成海『浄土教入門―法然上人とその門下の教学―』(平成一 本願寺出版社)。もともと本願寺派『宗報』に連続掲載されたものをまとめて出版されたもの。弁長・証空・親鸞の教義を、本願・念仏・信心などの諸項目を立てて解説している。目次を見るとその整全とした内容構成に驚く。初心者向けということできわめて平易な文体

がとられている。「個々の教義が一つの完成態をもつ」(六頁)という認識のもとに各師の教義を公平な視点から扱う点に好感がもてる。

以上私の主観めいたコメントを付しながら紹介したが、こうしてみても門下の教義研究も法然のそれには及ばないとしても相当の研究量のあることが改めて実感できる。それにしても法然門下は何故かくも分立・分流していかねばならなかったのだろうか。建暦二年(一一二二)、法然が大谷の禪房で息をひきとってから門人たちの間では一念多念論などの内部対立が激しくなっていく。法然教学が聖道門・浄土門という教判から説きおこし、仏教総体を包括的視点から捉え直すものであっただけに、そこには各師の仏教観・世界観をもってする様々な解釈が可能とならう。よく引用される資料だが、愚勸住信が正嘉元年(一一五七)に常陸国で著わした『私聚百因縁集』巻七に

門下幸西。成寛^{元祖}念^{元祖}。聖光。鎮西^{元祖}隆寛。長樂寺^{元祖}多念。證空。善風坊^{元祖}。西山長西。九品寺^{元祖}之諸祖。有^{元祖}之。門徒數千萬。上足^{元祖}此五人也。其外有^{元祖}二人。付^{元祖}三選^{元祖}採集^{元祖}。

とあり、ここには既に「一念義」「鎮西義」のように、各師の教義を差別的に理解しようとする指標が立てられている。そして東大寺の凝然が応長元年(一一三一)に著わした『浄土法門源流章』は、門下五流の教義内容を「幸西大徳立二念義」、「長樂寺隆寛律師立多念義」などの書き出して並列的・差別的に紹介しており、その整全とした内容構成もあって以後の門下研究のあり方に大きな影響を与えた。以後の研究は、基本的には凝然が設定した枠組に大なり小なり規定されての精密化であったと思う。

註① 門下の研究書・論文の紹介としてまとめたものに広川堯敏「法然門下の念仏思想」(『昭和五十八年度浄土教文化論研究報告』「浄土宗教学院研究所」)、同「法然門下における専修念仏義の展開」(『昭和五十九年度浄土教文化論研究報告二』)がある。

② 新版『大日本仏教全書』九二巻一八五頁。

③ 『浄土宗全書』十五卷五九一・五九四頁。